

2019

優秀作品集

小学生
区分

香川県知事賞

心と心をつなげよう



三木町立平井小学校 四年

平井

真凛

香川県



私の兄

私の兄は、高校三年生です。生まれた時から重いしょうがいを持っています。兄は、歩くことも、しゃべることも全くできません。だから、ふくを着がえることや、ごはんを食べることや、おふろに入ること、全部、お世話をしないといけません。兄は十七さいなので、体が大きいので、お世話をすることは、とてもたいへんです。でも、父は、兄といっしょにおふろに入ることが、楽しいと言います。母も姉たちも家族みんなで協力して、兄のお世話をしています。私たちはみんな、

「圭君。圭君。」

と、たくさん名前をよびかけて、いっぱい話しかけています。私は、毎日楽しく生活しています。でも、ときどき、兄も毎日楽しいのかなあ、と思います。兄は、体が不自由なので、自分で何もすることはできないし、お話することもできないからです。ですが、兄はいつもニコニコとうれしそうです。かぞくみんな、兄のえがおを見ると本当に幸せな気持ちになります。

兄の通う学校には、楽しい行事がたくさんあります。わたしの家族はみんなでさんかします。運動会では、みんなとても一生けんめい走っていました。文化さいでは、みんなといっしょに楽しくゲームをしました。さんかん日では、兄が学校でどんなふうにしてしているのか知ることができました。兄

の先生は、本当に小さな成長でも、心からよるこんでくれます。「シールをうまくはれたね。すごいね。」

「おちやを、こぼさずにのめたね。」

と、ほめてくれてはく手がおきました。わたしも、とてもあたたかい気持ちになって、いっしょに手をたたきました。

わたしたちが、ふつうにできるあたり前のことが、そこでは、努力をつみ重ねて、やっとできるようになるのだと分かりました。そして、ほめられると、兄は少しにっこりしてうれしい気持ちを感じ、いっばいあらわしていました。兄のまわりの人は、みんな兄を大切に思ってくれています。やさしく話しかけてくれます。みんな兄の幸せをねがっています。

兄は、しゃべることはできないけれど、みんなのあいじょうをきちんと感じていると思います。そして、兄がにっこりえがおになると、まわりの私たちも、しあわせな気持ちになります。

しょうがいを持っていない人も、持っていない人も、うれしい。たのしいという気持ちは、みんな同じです。だから兄の通う学校のように、しょうがいを持っている人と持っていない人が、かわり合いながら、相手を思いやり、いっしょに生きていけるといいなあ、と思いました。そして、私も、しょうがいだれかの役に立つことができる人、そして、だれかをえがおにできる人になりたいと考えます。



笑顔の理由

会社から帰ってきた母の顔はいつも、うれしそうに見えます。今まで、いくらかの会社でパートとして働いてきた母ですが、仕事帰りの母がこんなにも笑顔なのは見たことがありませんでした。

「隣の席のYさんがこんなことをしてくれたんだ。」

母は口癖のようにこう言います。きつと、Yさんはとてもやさしい人なのでしょう。それに、その話を聞いている自分も温かい気持ちになりました。

実は、Yさんは耳が聞こえません。初めてそれを聞いたとき、ぼくは少し驚きました。なぜなら、自分のこんなにも近くで、耳の不自由なことを感じたのは初めてだったからです。

母が初めて、今の仕事場に出勤したときのことです。母は事務系の仕事をしていて、毎日様々な書類が母のもとへと集まってきます。あまりの書類の多さに、母は本当にできるのか不安だったと言っていました。そんな時、Yさんが「失敗は私がフォローするから大丈夫だよ」と、気遣ってくれたそうです。母が初めて仕事から帰ってきたとき、あれほど笑顔だったのも当然のことだったのかもしれない。それに、Yさんには、人を笑顔にする不思議な力があるのだろうと思いました。

また、このような話を聞いたことがあります。仕事の中で、電卓が必要になったとき、母はいつもはYさんに借りていま

すが、その日はちょうどYさんが休みの日でした。しかし、ふと自分の机の上を見ると、Yさんの電卓が置いてあったそうです。

これは、とても小さな気遣いですが、ぼくにはできない気遣いです。

ぼくはこのような話を聞いて、Yさんのことを尊敬するようになりました。会社の人も、きつと、そんなYさんのことを尊敬していることでしょう。事実、Yさんが困っているときには、会社の人が助けてくれるそうです。

今の世の中が、すべての、障害のある方にとって住みやすいかは分かりません。しかし、行政やいろいろな企業による取り組みによって、支援の充実化やバリアフリー化が進んでいます。

でも、一番大切なのは、互いの人間が、尊敬しあい支えあうことだと思います。そこにはきつと障害の有無は関係ありません。障害があるから助けるのではなく、困っているから助ける。そういうった意識が大切なはずですよ。

人権はすべての人に平等にあります。働く権利や、心地よく住む権利もきつと、その一つであるはずですよ。だからこそ、母の会社のように、障害の有無に関わらず、人権を尊重できる会社が増えてほしいと思います。そして、自分も相手の人権を尊重できるような人間になりたいです。

大切なそんざい・盲導犬

私は、三年生のころテレビで、パピーウォーカーの話を見ていた時、世の中には目の不自由な人がいて、それを助ける盲導犬がいる事を初めて知りました。そしてその時（盲導犬を育てる人になりたい。そして盲導犬を育てて、目の不自由な人の生活を少しでも助けたいなあ。）と、思いました。それがきっかけで盲導犬の事を調べ始めました。調べ始めて、盲導犬と一緒に生活していた人は色々な事が出来るようになったと話している人が増えたと分かりました。そして四年生の五月、学校で「さぬきこどもの国」で開かれる「人権フェスティバル」があることを知りました。その中に「点字、盲導犬体験コーナー」がありました。良い機会だと思つて、六月二日に「人権フェスティバル」に行つてみました。

先ず、点字体験コーナーで実際自分の名前を点字でうつ事が出来たので、私も、やってみました。目の不自由な人は、文字も見えないので、読む事が出来ません。でも点字は、点がある事で字が読めます。点の位置、点の数は決まっています、それさえ覚えてしまえば簡単に読む事が出来ます。実際に点字をうつてみると意外と力があるので難しかったです。それだけでなく、名字と名前の間を分けずにつと、目の不自由な人は、名字がどこまで、名前がどこまでか分からなくなります。そうなる名前を間違えてしまいます。だから、名前と名字の間は少し空けないといけません。実際やってみないと分からない事がたくさんあると分かりました。

次に、盲導犬体験をしました。そこでは、盲導犬と歩く事が出来ます。私は目の見えない人と同じになるため、アイマスクをしました。歩くにはけっこう勇気がいらいます。なぜなら、アイマスクをしていると、暗やみなので物にぶつかりそうで

三木町立氷上小学校 四年

五味陽菜葵



こわいからです。その時に目の不自由な人とそうでない私達では生活が違う、事故などが起きやすくなるという事が分かりました。それでも、盲導犬が上手に物をよけてくれるので、少し勇気が出てきます。体験が終わって、目の不自由な人が盲導犬がいると色々出来ると言っていた事が少しだけ分かりました。アイマスクをつけて、盲導犬と歩いた時と、一人で歩く時の心強さをあたえてくれるそんざいだ。そして、今までは盲導犬に対しての考え方が全く変わりました。最初は、目の不自由な人をサポートするだけだと思つていましたが、今では、盲導犬がいると心強い、勇気をくれるそんざいなのだと感じました。

今回の体験で、私は先ず、障害者の人達に迷惑をかけている事があるのではないかと考えました。例えば、点字ブロックの上に自転車を置いていたり、ちゅう車場の障害者スペースに一般人の車をちゅう車していたりする事などです。

次に、障害者の人達のためにどんな工夫があるのかを考えました。例えば、音の出る信号機や、エレベーターにあるかがみや、自動販売機の取り出し口が真ん中な事など、街にはたくさん工夫がありました。それらの事を考えてみた時に、良い工夫も迷惑をかけている事が分かりました。今回、色々体験をしてみても、盲導犬がいる事や、街の工夫がある事で障害者の人達が少しでも楽な生活が出来ているのかもしれないと思えました。一人一人が自分の出来る事をすればいいと思えました。そして私は、今までよりも盲導犬の事を調べていこうと思えました。



障害のある人への差別をなくすために

人間には障害のある人とない人がいます。その障害もたくさん種類があり、耳の聞こえない人や体の力がない人、しゃべれない人、目の見えない人など、様々です。でも私たちはその人たちを差別してはいけません。障害のあるなしにかかわらずだれもが大切な存在です。その人がやりたい事をできるまで待つなど、その人ができるように配慮しようという気持ちがとても大切です。

でも、今はまだ差別があるかもしれません。その人は、もう出来ないからと、あきらめる気持ちからはじまるのが差別だと思います。障害のある人だって、やりたいことはたくさんあるはずです。その人が、何をしたいのか、分からないことだってあります。でもそれが分かるように私たちも努力し、助けないと、その人は困ってしまいます。

私の通っている学校にも、いろいろな友だちがいます。みんな、自分が出来た事を最後までしようとがんばっています。それを見守っている優しい先生たちもたくさんいます。でも、それを見守れない人も、この世の中にはたくさんいるかもしれません。

私はそんなことがなくなるようにできることがたくさんあると思います。今、この日本で行っていることは、十二月にある障害者週間などがあります。障害がある人とふれ

合うきかいは、私にはあまりありません。でも、ふれ合うきかいが少なくても、ふだんからできることはあると思います。

日常でどんなことが出来るかを考えることがとても大切です。私たちができることとして、ボランティアに参加することがあります。私はあまりボランティアをしたことがありません。でも、これから、わたしは、ボランティアなどの活動があれば、積極的に参加したいです。

私のしよ来の夢は、介護福祉士です。私は、障害のある人と接するのが楽しいと思っています。でも、それが続けられるかは、まだ分かりません。私は、介護福祉士の仕事を続けることができたいと思います。私は障害がある人への差別がなくなるために、できることからやしていきたいと思います。障害のある人とのふれあいを増やし、その人のことを分かって、その人に負担をかけないことをしていきたいです。障害のある人とふれ合って、その人が楽しめることを考えていきたいです。

私はしよ来の夢に向かって障害のある人といっしょに困難を乗り越えていけたらいいと思います。一つの偏見から始まる差別をゼロにしていきたいです。

知ってほしい私達の事

私は、言葉で相手に意見を伝える事や、たくさんの事を覚える事が苦手です。でも、少しでも苦手な事ができるように頑張って自信が持てるように毎日がんばっています。学校だけでなく、放課後デイサービス「たけのこ」へも、土曜日や夏休みなどの長期の休みを利用して通っています。

どんなことをしているかというと、調理実習、SST(自分で考えたことを言葉にして相手に伝える練習)、買い物練習、畑で収穫した野菜の販売、自分の苦手な事ができるようにするための活動などです。

年れいはさまざま、私が一番上の学年になります。幼い友達をお世話することもあります。みんな苦手な事やできる事、言葉で伝える事ができないなどありますが、「たけのこ」でがんばっています。

私はいつも周りの友達から助けをもらう事が多いです。今まで困った事があると、私の様子を見て声をかけてくれたり、優しく教えてくれて、うれしいです。できない事があっても、悪口を言われたり、いやだと思ってしまうような態度もされた事はありません。

でも社会では、少し違う所があると無視したり、関わりをもととしないかったり、心が痛くなるような言葉を言う人もいます。私も一度だけいやな気持ちになった事があります。それは、「たけのこ」で、収穫した野菜を販売していた時の事です。みんな声をお客さんに来てもらおうと呼びこみをしていました。そこに、自転車に乗った人が来ました。

坂出市立白峰中学校 一年

中井 理加



その人は、声をかけても何も言わず、じっと私達の方を見ていました。その目がとても冷たく感じたのを、今でも覚えています。言葉でなくても、態度で人をいやな気持ちにさせてしまう事があると知りました。

弱い人の立場は、まだ十分には守られておらず、やんわり悲しい気持ちになったりすることがあります。何かをしようとしても仲間に入れてもらえないのかという不安をもっている人も多くいると思います。

そんな人達が社会に出ていくには、わけへだてないやさしさ、態度、言葉がけが一つのきっかけとなり、がんばっていかうという気持ちにもなれるかもしれません。

私も助けをもらう立場から、助けてあげる立場に、なれるようになりたいです。

来年は、東京でオリンピック・パラリンピックが開催されます。体の不自由な人たちの活やくが、できる機会です。障がいのない人と同じ種目をがんばっている人もいます。その努力は、並たいていのものではない事が分かります。

私は、何もしないうちから、あきらめる事が多いです。でも、みんなと同じ事ができるように努力して、できた時はとてもうれしくなり、自信にもなりました。助けてもらうだけではなく、自分の努力も続けて夢をかなえたいです。障がいがない人もある人も、笑顔で過ごせる社会になってほしいと思います。



今、わたしにできること

ときどき、障害を持っている人に暴力をふるったり暴言を吐いたりしたというニュースを見かけます。何年か前に、知的障害を持った男性が、通っている施設の職員から暴力や暴言を受けていたというニュースを見ました。複数の職員がその男性にビンタをしたり、「バカ、殺すぞ。」

などとひどい言葉をあびせていたりしたのです。その男性の保護者は、まさか自分の子が暴力を受けていたなんて信じられないし、ごくショックだったそうです。男性も本当に怖かった、と言っていました。

全国の施設での知的障害者虐待の通報件数は年々増加していて、死亡してしまうケースもあるそうです。なぜこんな悲しいことが起こり続けるのか調べてみると、障害を持った人が通う施設の職員になるために、資格がいらぬということ、が分かりました。障害のある人の気持ちを理解しようとして、しっかりと寄り添うことができる人しか、この仕事はできないと思います。そのためには専門の知識を身につけることも必要ではないでしょうか。だからいつまでたっても職員による虐待が後を絶たないんだと思います。このような事件を少しでもなくすために私たちができることは、ひとりひとりがこの問題と真剣に向き合い、考えることだと思います。

私は「障害者」という言葉に疑問を持ちます。「障害」という言葉を国語辞典で調べると、「じやまになること。また、じやまになるもの。体に故障があること。」この三つの意味がありました。私は障害を持っている人のことがじやまだと感じたことはありません。じやまだと思っている人がいないと信じたいけど、きつとじやまとか迷惑とか思っている人もいるんだらうなあと思うとつらくなります。小学生のとき、授業で目が見えない視覚障害の方のお話をききました。クラスでは、目が見えない人がどれだけ大変で不自由な思いをしているか

が分かった、という感想が多かったのですが、その方は、感想をきいたあと、

「目が見える人とは方法が少し違ってはいるけれど、訓練や慣れることでみんなと同じことがなんでもできるということを知ってほしい。」

とおっしゃっていました。私は何かできないことがあったら諦めてしまうこともあるけど、その言葉を聞いて勇気づけられました。

「人権について語るとき、私たちは障害を持っている人全てを一方的に『弱者』とみなし、健常者が彼らに多くの手を差し伸べることができるとかどうかを問題にしてしまう。」という話を聞いたことがあります。小学生の時の授業で、「障害者は不自由でかわいそうなので、優しくしたり手助けをしたりしなくてはいけない。」と言われました。でもそれは障害のない人間の目線で見えています。かわいそうだとか気の毒だという気持ちで接すること自体、心のどこかで差別をしているのであって平等ではありません。お話をしてくださった視覚障害者を持っている方も、

「自分が障害を持っていないかったら、きつとみんなと同じようにかわいそうだと感じると思うけど、今の僕は全くそう思いません。目が見えないことは背が低いとか足がおそいということと同じように個性のひとつだと思ふ。他の人と比べて特別にちがつているとは思っていない。」

とおっしゃっていました。私よりも全然心が強くてかっこよかったです。全く『弱者』だと思えません。むしろ尊敬すべき強い人です。

私は障害を持っている方の気持ちや完璧に分かるわけじゃないし、どう接するのが正解なのか分かりません。でも、一番大切なのは、理解しようとする気持ちだと思います。手を取り合っている世界になればいいなと心から願っています。

さぬき市立長尾小学校 五年

砂井すない柚乃ゆの

ひいおばあちゃんのお出かけ

夏休みに、ひいおばあちゃんとスーパーに出かけました。ひいおばあちゃんは、足が痛くてつえをつかないと歩けません。わたしが小さいころは、まだ家にいて、畑で野菜を作ったり家事をしたりしていました。でも、足や手の関節がかたまっていく病気で、どんどん動けなくなるのが分かっていたので、今はしせつに入っています。

しせつでの生活で必要な物があるので、ひいおばあちゃんと、いっしょにスーパーへ買い物に行くことになりました。まず、ベッドから、

「よいしょ。」

と言って立ち上がります。そして、つえをついてしせつの出口に向かいます。しせつは、バリアフリーになっているので、ゆっくりだけど大じょうぶです。大変なのは、車に乗る時、車のだん差に足が上がらないことです。

わたしは、すぐに、ささえようと思いました。でも、ひいおばあちゃんが、

「大じょうぶ。」

と言いました。そして、ゆっくり車に乗りました。車に乗ったひいおばあちゃんが、

「さっきは、ありがとう。でも、ゆっくりでも自分でできるうちは、ちよつとのことでも、自分でせないかんのよ。」
と言いました。車からおりる時も、買い物の中も、わたしは、手を出したい気持ちをぐつとがまんをして、ひいおばあちゃんを見守りました。

実は、その日のひいおばあちゃんは、いつもとはちがっていました。そのすがたを見て、わたしは、とまどってしまって、どうしたらよいか分からなくなっていました。でも、ひいおばあちゃんは、前と変わらず、わたしに、何かしてあげたいと思っているし、心配もしてくれるやさしいひいおばあちゃんのままでした。

だから、特別あつかいをせずに、ただこまっていたら、手伝おうという気持ちが大事なかなあと思いました。

それは、ひいおばあちゃんだけではなく、障害のある人すべてに対してもそうだと思います。

ひいおばあちゃんは、毎日リハビリに、がんばってしています。わたしも、ひいおばあちゃんに会った時は、学校であったことやいろいろなことを前と同じように話してみようと思います。いっしょに過ごす時間を大切にして、大好きなひいおばあちゃんが、長生きしてくれたらいいなあと思います。

小さな事が大きな喜びへ

僕は、小学三年の夏休みに足をケガをしました。足のケガがなかなか治らず、小学校卒業まで松葉杖がないと歩けませんでした。その時に僕自身が経験し、思った事、感じた事を作文にしたいと思いました。

まず、ケガをしてすぐの時には、足にギプスがあり、松葉杖も上手く使えず、車椅子での移動が主でした。松葉杖は、両手がふさがるので、荷物は、背負える物しか持てず、とても不便でした。また、車椅子では、平らな場所だとスムーズですが、普段だと気づかない段差でも上手く進めませんでした。しばらくすると、ギプスもとれ、松葉杖も一本の使用で動けるようになり、片手が使える事がとてもうれしかったのを覚えています。

僕が、車椅子や松葉杖を使っていて、一番うれしかった事は、友達が僕を助けてくれた事です。僕が移動の時には、荷物を持ってくれたり、取ってきてくれたりしました。僕が頼まなくても気づいて、先にしてくれた事は、とても助かり、うれしかったのをよく覚えています。修学旅行の時にも僕は、松葉杖でしたが、同じグループになった友達には、嫌な顔をせず、僕にあわせて行動してくれました。USJでは、ゲストサポートパスというサービスがあり、階段などを使わずにアトラクションを楽しむサービスがありました。でもそれを使うと、他の人とは、違う所に並び、裏から入っていかなければいけません、友達が僕に付き添って

くれ、いくつかのアトラクションを楽しむ事ができ、とてもいい思い出ができました。僕自身、修学旅行に行く事は、楽しみの反面、不安もありましたが、先生、友達、そして各施設のサービスのおかげで、とても楽しむ事ができました。

今、僕は、足も治り、松葉杖も使わなくなりました。今、できる普通の事も松葉杖を使っている時は、できませんでした。そして、僕自身、気づかなかった事をたくさん知る経験だったと今では思います。自分の事もしなければいけないのに僕にそっと手を差しのべてくれていた友達の優しさは、誰もができる事ではないと思います。電車に乗っていても気づかず、席をゆずってもらえなかった事もありました。大人ができない事をしてくれる友達がいる事は、僕にとってかけがえのない宝物だと思います。

これから、僕自身、次は、困っている人がいれば、手を差しのべられる人になっていきたいと思っています。僕がしてくれてうれしかった事を次は、僕がしていけるようになりたいと思います。そして、僕を助けてくれた友達は、ずっと大切にしていきたいと思います。僕にとって、足をケガをした事は、つらい出来事でしたが、友達の優しさなど、普段、気づく事ができない事を知る事ができたので、今となっては、貴重な経験ができてよかったと思います。

丸亀市立東中学校 二年

鼻崎 はなさき翼 つばさ

2019

優秀作品集

中学生
区分

香川県知事賞

Let's
try!!



綾川町立綾南中学校 三年

釜野 かまの

珠波 みなみ



小学生
区分

香川県健康福祉部長賞

みんなとなかよく



丸亀市立飯山北小学校

二年

瀬尾

來夢



小学生
区分

香川県健康福祉部長賞

みんなでダンス



高松市立鶴尾小学校

四年

知念

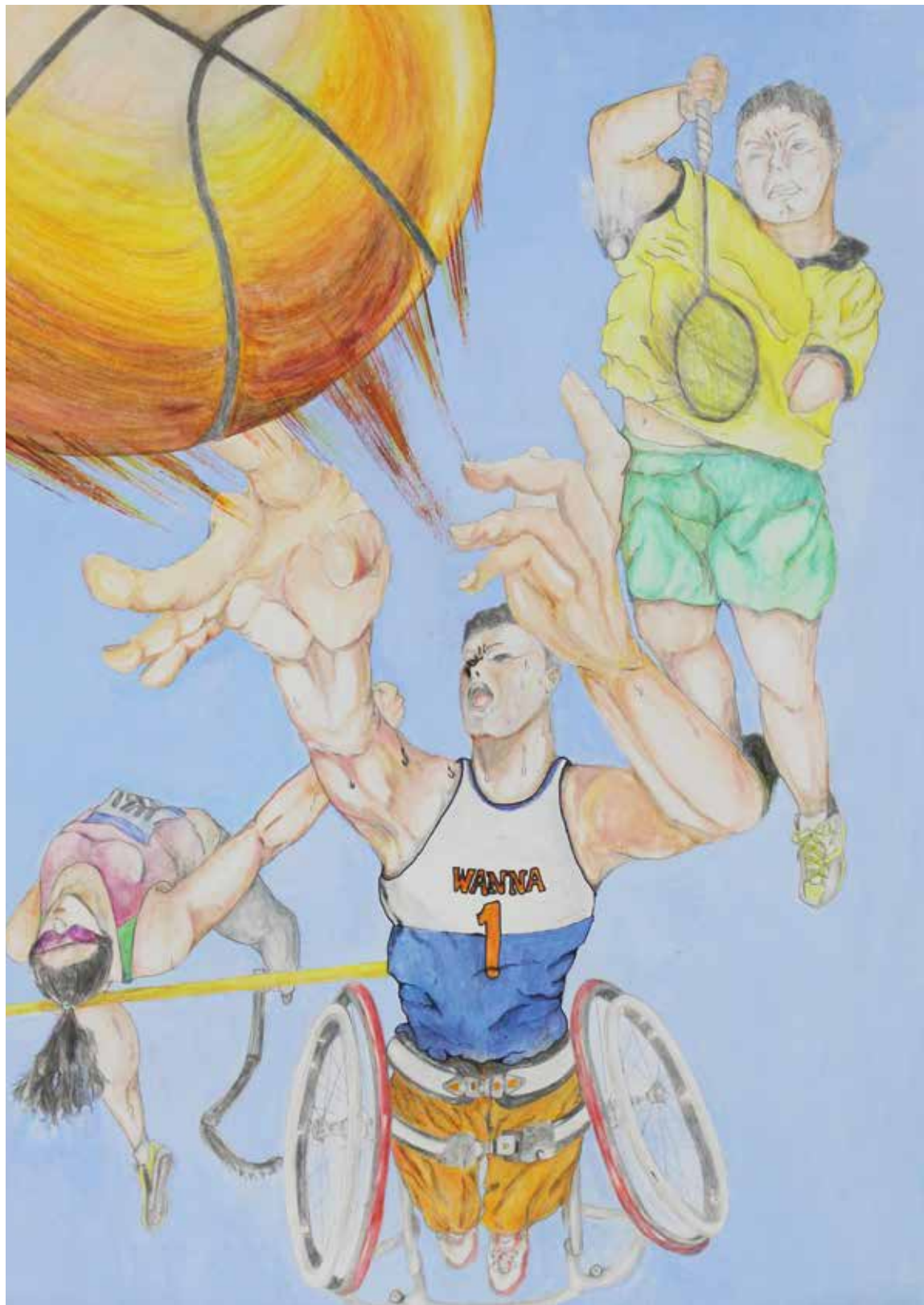
樹音



中学生
区分

香川県健康福祉部長賞

やればできる



観音寺市立観音寺中学校

三年

大西 おおにし

陽力 はるちか



中学生
区分

香川県健康福祉部長賞

力を合わせ 勝利へ！



観音寺市立観音寺中学校

三年

六車 むぐるま

咲紀 さき



観音寺市立観音寺小学校

三年

竹田 たけだ

羽那 はな



小学生
区分

審査員特別賞

もうどう犬といっしょに



観音寺市立観音寺中学校

三年

西田 にしだ

若葉 わかば



中学生
区分

審査員特別賞

全員で戦おう！感動を届けよう！

心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2 0 1 9



香川県 健康福祉部 障害福祉課

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号